

メキシコ系アメリカ住民の停滞的適応の分析： 2世、2.5世、3世の比較研究¹

川野 幸男

はじめに

アメリカにおけるヒスパニック²人口は1980年代以降急速に増大し、1990年の2,240万人から2004年の4,130万人まで15年でほぼ倍増した (Census Bureau 2005)。なかでもメキシコ人の比率が高く、全体の6割以上 (64%) を占めている (同上)。ヒスパニック人口の増大はラテン・アメリカからの移民の流入増が最大の要因だが、彼らの出生率が他の人種・民族諸集団よりも高く、子供の数が多いこともまた重要である。アメリカの小中学児童および高校生徒のおよそ5人に1人 (18%) がヒスパニックであり、その子供たちのうち約3人に一人 (29%) が貧困ライン以下の世帯で生活している (Child Trends Databank 2004)。メキシコ系移民の場合はとくに両親の教育レベルや所得が低く、その子供たちが貧困の中で成長していることが問題になっている³。古典的な同化理論によれば、移民の家族は世代を重ねるにつれ文化喪失 (Acculturation) と社会経済的適応をすすめてネイティブ⁴人口と均等化するのだが、メキシコ系アメリカ人の場合にはたとえ何代も世代を重ねたとしても同等どころか停滞ないし低落さえすることが指摘されてきた (Waldinger and Perlman 1998)。

これを受けてヒスパニックの移民の継続的流入がアメリカにおける労働力の質的低下に

¹ 本研究の最初の成果は東北大学大学院文学研究科COE—社会階層と不平等研究教育拠点の *Annual Report 2004* (pp. 113-134) に "Generational Differences in Mexican-American's Earnings: Comparing the Second and Third Generation" として発表されている。またその概要はアメリカ人口学会 (Population Association of America) の年次総会において2005年4月に発表された。今回の研究費用の一部は大東文化大学特別研究助成ならびに大東文化大学経済研究所の支援を受けている。

² スペイン語を母語とする国々から来た人々およびその子孫を指す。

³ Van Hook (2004) によれば、2000年に貧困線以下にいる18歳未満のメキシコ系2世の割合は32%であった。

⁴ 本研究ではアメリカ生まれという意味で「ネイティブ」を用いる。

結びつくとして、移民ヴィザの制限ないし能力にもとづく選別制度の導入を求める意見も登場してきた (Borjas 1999など)。例えば Huntingtonが*Foreign Policy*紙上で「ヒスパニック移民の継続的流入はアメリカを二つの群集、二つの文化、二つの言語に分裂させている。過去の移民と異なり、メキシコ人や他のラテン・アメリカ系の移民はアメリカの主流文化に同化していない。...これを無視することはアメリカにとって危険な賭けである。」(2004 : 30) と主張したことから、同紙上を中心にかなりの論争が繰り広げられた⁵。

アメリカ史上、このような扇情的な排外主義者が繰り返し登場すること自体は決して珍しいことではないが、彼らの論争はアメリカにおける移民研究が今後注目すべき点も指摘している。Watersは、「これからの実証的かつ理論的な移民研究は、移民の定着パターンが新しい地域にシフトしていることと、新移民の継続的流入によって移民集団がつねに補填されていることに注目する必要がある」(2005 : 107) と述べており、特にこの第二の点が本論文の目的と共通している。つまり19世紀末から20世紀初頭の大量移民と1965年以降の新移民⁶とを比較すると、前者が戦争などによる出身国からの断絶を経てアメリカへ適応していったのに対して、後者は大規模かつ継続的な流入という新しい文脈のなかでいかにこの国に適応してゆくのかという問題である。そして新移民が形成するマイノリティの中で最大の集団をなすメキシコ系アメリカ住民のアメリカ経済社会への適応の成否は、今後の移民政策のみならず、アメリカ社会一般における格差問題についても非常に重要な示唆を含むものである。

本研究はそのような問題認識をふまえ、メキシコ系アメリカ人の世代間における賃金収入の格差について考察する。ただし、1-2世間の比較においてはアメリカ生まれの2世のほうが1世よりも圧倒的に高収入であることは明らかなので、より議論の余地のある2-3世間の比較をおこなうことにする。つまりメキシコ系アメリカ人の問題の本質は、彼らの2世以降の世代の行方が上向きなのか下向きなのかというところにある。もうひとつの新しい試みとして、本研究では2.5世という分類を導入する。2.5世とは2世のなかにあ

⁵ その後の同誌も参照。彼の論文は *Who Are We* (2004, Simon & Schuster, Inc. N. Y) の一部抜粋であり、すでに邦訳 (鈴木主税訳『分断されるアメリカ』集英社) も出版されている。

⁶ アメリカ史では、通常前者を新移民と呼ぶが、本論文では65年の法改正以後の多人種化した移民を指す (Bean and Stevens 2003 : Ch. 5)

って片親はメキシコ生まれのメキシコ人で、もう片方の親はアメリカ生まれのアメリカ人という背景をもつものごとである。これに対してメキシコ生まれの両親を持ってアメリカで生まれたものは2世の中でもいわば「純粋な」2世である⁷。本研究はメキシコ系アメリカ人純2世と2.5世のアメリカへの適応における相違について分析し、その結果どちらのグループが上向きないし停滞・下向きの適応パターンを示すかということに注目する。結論を先取りしていえば、これら2つのグループは停滞と上向きのパターンをそれぞれ見せている。

この研究トピックは情報不足および標本不足から、従来あまり注目されて来なかった。まずデータの問題としては、既存の公開データでは回答者の（同居・非同居にかかわらず）両親の出身地の情報が限られていたことから、本人がどの世代に属するかを特定することが困難だったことがある。次にメキシコ系移民2世の多くが80年代に急増したメキシコ移民の子供であり、彼らが成長して労働市場に参入してくるのはおもに2000年代以降であったことから、標本数がかぎられていた。しかし、時とともに状況は変わりつつあり、今回1994年から2003年までのデータを用いることにより、かろうじてこの新移民2世の世代を取り入れた分析が可能になった。

1. 同化論の概観および再構成

移民ならびにその子供世代の社会経済的動態に関しては大まかに3つの視角、すなわち①直線的同化論、②曲線的同化論、③分断的同化論にまとめることができる。第1の直線的同化論は、ヨーロッパ系移民の経験にもとづいて、ヒスパニック系の場合にも移民からおおよそ3世代ほどのあいだに社会の主流派（白人ネイティブ）に合流すると考える。例えばSmith（2003）は過去の国勢調査を集計して歴史上、メキシコ系アメリカ人の学歴と所得が白人ネイティブに追いついてきたと主張している。あるいはGans（1992）のように、同化は直線的ではなく「デコボコ道（Bumpy road）」だというような修正を加えた意見もある。しかしながら直線的同化論は、アメリカにおいて主流をなすヨーロッパ系白人と新

⁷ 以下の議論で「2世」とは両親のうち少なくともひとりがメキシコ人である2世一般を指すものとし、純2世とは2世のうち両親がともにメキシコ人であるものを指すこととする。

移民との民族的相異ならびに教育や貧困の統計にみられる両者の格差を考慮すれば、非現実的であったことが証明されつつあり、いずれは第2、第3の視点に譲歩せざるを得ないであろう。このことは長期的にはアングロ・サクソンとラテン・アメリカ系住民の格差が解消する可能性を否定するものではないが、格差の持続という現実を前提に、次に紹介するような視点を介して政策的には格差解消を目的とするほうが合理的である。

第2の視点、曲線的同化論は別名「移民楽観論 (Immigrant Optimism)」とも呼ばれ、2世がそれ以降の世代よりも成功すると主張するものである (Livingston and Kahn 2002)。なぜ曲線的かという、縦軸を収入なり所得として横軸に世代をとって図表化すると、1世から2世への急上昇と2世以降の下降局面によって山形のカーブができることによる。この視点によれば2世は移民である両親の高いモチベーション⁸を受け継ぎ、これにネイティブである利点すなわち英語の能力や学校教育の機会に恵まれることにより、両親の世代よりも高い所得を獲得する。その一方で第3世代は2世と同等の教育を受けるが、移民世代から2世の両親が受け継いだモチベーションは2世を超えて大きく減退するため2世以上の成果をあげられないという (同上)。この問題に関する初期の実証研究にはChiswick (1977) があり、1970年のアメリカ国勢調査を用いて⁹、少なくとも一人の外国生まれの親をもつ白人でネイティブの2世は、両親がネイティブの3世よりも高い収入を得ていたことを明らかにした。Carliner (1980) は白人以外の民族グループについても調査して、同様に2世のほうが3世よりも高収入であることを確認した。また、他のデータ¹⁰を用いたLivingston and Kahn (2002) の研究は、メキシコ系の世代間格差が1世から2世にかけて上昇し、3世では下降する曲線形をなしているという結論を出している。

この曲線的同化理論は2世の子弟の学業成績に関する研究から派生してきた。前にも述べたようにメキシコ系2世はまだ全体に若い世代であったので、まずは外国籍の親をもつということの学齢児童の成績との関係の研究が早い時期から始まり、現在も続いている

⁸ 移民 (特に労働目的の移民) は、あえて外国に出るという決断をしたという事実において、その出身国の母集団よりもモチベーションが高いというのが一般的に信じられてきた。これを移民の自己選択理論という。詳細はBorjas (1991) を参照。

⁹ 70年の国勢調査は回答者の両親の出生地を記録していた。この後の国勢調査ではこの質問は消去され、祖先についての質問に置き換えられた。

¹⁰ LNPS (Latino National Political Survey) とPSID (Panel Study of Income Dynamics)。

(Kao and Tienda 1995 ; Kao and Thompson 2003 ; Pong 2003)。それらの研究によれば、両親の少なくとも一方が外国生まれである子供は、本人が外国生まれである子供のみならず、両親がともにネイティブである3世の子供よりもよい成績を収める。この理由は、子供の教育に対する移民家族の態度やしつけ、そしてアメリカにおける彼らの未来に希望を持つ“楽観主義 (Optimism)”が、子供の上昇志向や学業成績に望ましい影響を及ぼすと考えられるからである¹¹。しかし、ネイティブを両親とする3世以降の世代では好成績が見られなくなる。それはネイティブの家族においては、移民家族の場合のような教育への熱心で積極的な関与がないからであると考えられている。さらには民族による差異も見られ、メキシコ人／ラテン系2世よりもアジア系2世のあいだではこの曲線的同化の傾向が強く見られるという (Kao and Tienda 1995)。

2世の好成績ならびに学校成績の世代間格差が労働市場における成果 (所得) にも反映するとすれば、世代間の収入格差もまた、2世から3世にかけて低落してゆくと考えられる。しかしながら、他世代に対する2世の優位性という点が全ての民族グループに適用できるかどうかには留保が必要である。Chiswick (1997) は、メキシコ系の親を持つことは利益ではなく、不利益が有意に大きいことを指摘している。5つの民族集団を比較したCarliner (1980) もまた、フィリピン系アメリカ人においてのみ2世から3世への収入の低落が観察されたとしている。

第3の視点、停滞論ないし分断的同化論によれば、非ヨーロッパ系移民の子孫はアメリカ人の主流グループに完全に同化することはありません、社会経済的に彼らの所属するところのセグメント (民族性により区分された一部の産業と階層) に同化してゆくというものである。この視点によれば、エスニック・マイノリティはアメリカ人の主流グループに同化することなく、彼ら自身の階層に入り込むことにより上向の動態も失い、したがって2世と3世の間の格差も生じない。またメキシコ人というアイデンティティが学校での成績や将来への希望にマイナスの影響を与えているという研究もある (Portes and Hao 2004 ; Pong 2003)。学校での人的資本の蓄積が不足すれば、その結果として成長後の社会経済的地位は低迷し、さらに彼らの社会動態をいわばメキシコ系という階層に固定化していわゆ

¹¹ このような家族・親族における関係上のポジティブな要素を家族社会資本 (family social capital) という。

る「貧困の悪循環」を生じさせるというものである (Portes and Rumbaut 2001)。

Grogger and Trejo (2002) は、本研究でも用いるCPS (Current Population Survey) を使って2世と3世のメキシコ系アメリカ人が収入という点でなんら有意な差がないことを確認している。この結論は前述のLivingston and Kahn (2002) と矛盾している。この矛盾は統計数値の解釈に問題があると考えられる。Grogger and Trejo (同上) はCPSのデータから約56,000人のメキシコ人を特定し、そのうち約半分を1世である移民、残りの約半数ずつをメキシコ系2世と3世に分類した。このようになりに多くの標本を抽出したうえで、2世と3世のあいだには収入にかんして有意な格差がないという結論が導かれた。これに対してLivingston and Kahn (2002) では標本数が3世代合わせて553と少なく、また2・3世の間に統計的に有意な差異も観察されていなかった。彼らは複数の実証モデルを通じて曲線的同化論を裏付けるような (他の要因を捨象しても2世の収入が3世の収入を上回るような) 一定の方向性をもった係数が観察されたとしているが、そのような推論は統計学的には支持されえない。2世なり3世を示すダミー変数に対する回帰係数が有意でないのであれば、これはゼロであると解釈するのが妥当であり、係数がプラスかマイナスかということも意味を持たないと考えるべきである。

以上のように、現在のところ実証的にはGrogger and Trejo (2002) の停滞論的解釈が最も信頼度が高いといえる。すると、曲線的同化論によってある程度証明されている2世の教育面での優位が、労働市場における賃金収入に反映されていないのはなぜか、という問題に行きつく。これはメキシコ系の2世労働者の教育から仕事への移行が円滑に進んでいないのではないかと、という仮説につながる。つまり教育面での動態は獲得しているにもかかわらず、経済的適応が一定の階層の範囲から出ることはないという、分断的同化論の解釈に説得力がある。

また、先行研究の方法論には以下の2点において改善の余地があると考えられる。第1の問題は、多くの先行研究が1世・2世・3世間の比較分析をしているが、そのなかで1世を取り上げることのメリットが少ないということである。実際のところ1世から2世への飛躍的な所得の向上についてはもはや議論の余地はない。人種・民族にかかわらず外国生まれであることとネイティブであることのあいだには当然大きな格差があるので、ことさら1世から2世への変化をとりあげる必要はない。そして直線論・曲線論・停滞論の可

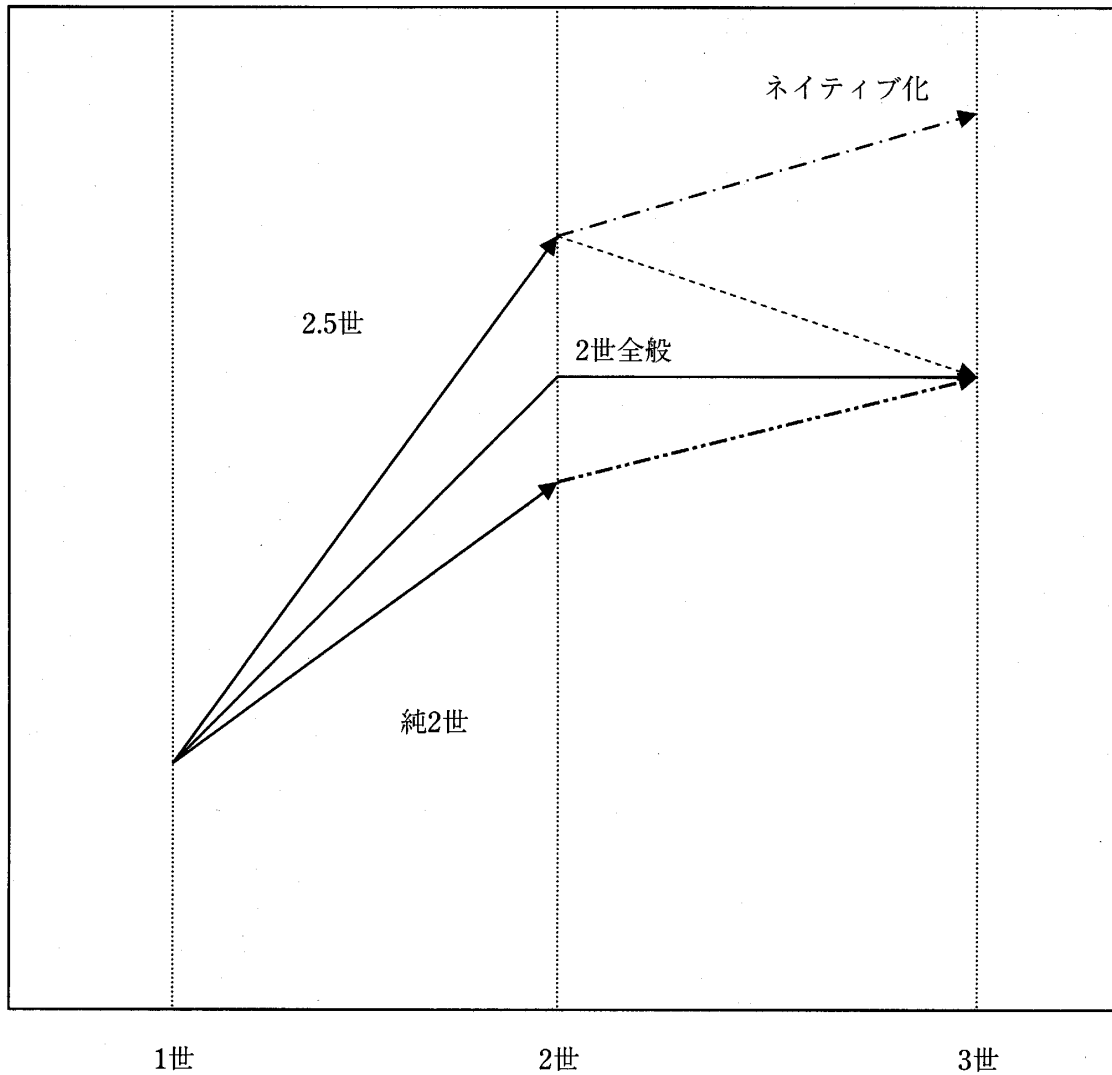
否を問題とするならば、2世以降の軌道が上向きであるか、下向きであるか、それとも水平的であるかによって判断ができるので、むしろ注視すべきは2世以降の変化である。

(ただし、以下に登場する記述統計では1世も含めて比較しながら紹介している。統計分析には1世を含んでいない。)

第2の問題は、上に紹介した先行研究の全てが2世の定義を「少なくとも一人が外国人である」としているが、その中には父母のうち一人だけがメキシコ移民である労働者と、両親がともにメキシコ移民である労働者が混在していることである。前者は2.5世代とよばれ、世代混合的両親をもつ。この両親のかなりの部分はメキシコ人同士（片方がメキシコで、もう一方がアメリカで生まれた）であるが、人種混合的なカップルも少なくはない。いずれにしても彼らの場合、子供だけでなく片親もネイティブであることから、前述の曲線的同化論のいう家族社会資本のプールがより強力に存在する可能性がある。そして実際、一部の非メキシコ系のパートナーを持つ場合には夫婦の教育レベルが著しく高いとのレポートもある（Duncan and Trejo 2004）。これに対して両親がメキシコ生まれの純2世の場合には家庭で使用する言語がスペイン語のみであったり夫婦ともに低収入であったりすることから、前者に比べて子供の人的資本蓄積に不利であると推測される。したがって、2世という集団を少なくとも上記の2つに分けて考える必要性は明らかであろう。

2.5世に関するこのような推測が正しければ、過去の曲線的同化論の実証研究において高い適応力を示していたのはこのグループのみであり、両親をメキシコ人とする純2世の適応度は比較的低いのではないかと想定しうる。そして先行研究において曲線論と停滞論をそれぞれ支持するデータが出てくるのも、2世の定義において2.5世と純2世がサンプルに入ってくる割合の大小によって生じたのではないだろうか。したがって両グループを分離して比較すれば、次ページの図1に示すように異なった適応パターンを示すと考えられる。2.5世と純2世の中間に2世全般の平均値が来るとすれば、過去の実証研究における曲線論と停滞論の混在が説明できる。そして図中の2.5世から3世への2つの経路（破線と一点鎖線）は、アイデンティティの自己選択における分岐を示している：すなわち2.5世の子供のうちのある部分は自分のメキシコ人としての伝統を維持する（破線）が、他の部分は自分を一般のアメリカ人と考えることで、このグループから退出する（一点鎖線）。そして純2世の次世代の一部にもそのような退出はあるが、少なくとも一方の祖父母がメ

図1 適応パターンのイメージ図



キシコ人なので、エスニシティを維持する人が多い（二点鎖線）と思われる。

本研究の分析は次の2つの仮説にそって展開する。第1に彼らの産業・職業構成を比較して、もし分断的同化論が正しいとすれば、彼らの産業・職業構成が2世以降固定化して、まれにしかそこから出られない構造があると推測する。ここではメキシコ系1世や白人・黒人のネイティブの産業・職業構成も参考にして比較をおこなう。とはいえ、ここでの問題は2世と3世が産業・職業構成において異なっているかどうかである。男女の労働者の就業パターンは大きく異なるので、それぞれ別々に分析する。

第2に、メキシコ系労働者の2世と3世を多変量回帰分析によって直接比較することに

より、「2世の優位性」ないし、同じことだが「3世の非優位性」の問題にアプローチする。ここでの非説明変数としては労働1時間あたりの収入を用い、年齢や人的資本、地理的要因等をコントロールした上で、メキシコ生まれの親を1人もつこと、2人もつこと、そして1人も持たないことの効果を推定する。これにより2.5世の場合には直線的同化論が限定的に適用され、純2世においては分断的同化論が妥当であることを証明する。

2. データと分析方法

本研究が用いるのはCPS (Current Population Survey) の月別基本データファイル (Basic Monthly Files) を1994年から2003年までプールしたもので、各月の全標本の8分の1にあたる世帯グループを抜き出したものを基礎としている。この調査およびデータについて極めて簡単に説明しておこう¹²。CPSは連邦統計局が労働省労働統計局の委託を受けて執行している調査であり、その主目的はアメリカ全体の雇用統計を継続的に提供することにある。質問票のフォーマットは国勢調査におおよそ類似しており、移民や人種・民族に関する質問も含まれているのでアメリカ全体を対象とする移民研究で利用されることも多い。10年に1度の国勢調査をベースに全国で毎月約5万世帯を対象にして、調査員の訪問面接を軸に実施されている。調査結果は世帯メンバーを同定できる状態の個票データとして、プライバシーの保護や齟齬の訂正等の処理の後に月別データとして公開される。データは上記のベーシック・ファイルとサプリメント・ファイルがあり、後者はその時々テーマについての詳細な質問を非連続的に織り込んでいるものである。

次に、少々分かりにくいと思われるローテーションについて説明する。毎月の標本はサンプリング・バイアスによる推計の非連続性を回避するために、ある月と翌月で4分の3がオーバーラップして、4ヶ月のローテーションの中で毎月4分の1が入れ替わるようにデザインされている。したがって、ある月における標本世帯の4分の1は調査から退出するのでアウトゴーイング・ローテーション・グループ (ORG=Outgoing Rotation Group) と呼ばれる。そして、そのうちの半分は8ヵ月後 (初めての面接からちょうど1年後) に再度標本に入ってくる。これはある年から次の年へかけてオーバーラップ (標本の2分の

¹² 詳細は米国連邦統計局のウェブサイトで公開されているテクニカル・ドキュメントを参照。

1が重複する) を作ることによって年毎のサンプリングによる変動をおさえるためである。標本に入った世帯は2度目のORGを経て、16ヶ月を1サイクルとして完全に退出する。つまり最初の4ヶ月の面接と、それから8ヶ月を過ぎて2度目の4ヶ月の面接という8回の面接ローテーションのどこかのポジションに、ある月の標本の8分の1ずつが属しているということである。本節のはじめに述べた8分の1とはこのことである。

CPSではORGにあたる成人にのみ所得・収入の質問をするので¹³、本研究の分析にはどうしてもORGが必要であった。そしてそのORGの半分のみを選択しているのは、上記から分かるようにORGには4ヶ月目と8ヶ月目のグループがあり、これらを両方取り入れてしまうと同一人物が2度データに現れることになるからである。本研究では4ヶ月目にあたるORGのみを抽出している。連邦統計局によれば、これらのローテーション・グループはそれぞれが全国レベルの階層化無作為抽出によって形成されており、つまり独立した代表的標本を成している。したがって、たとえば1年間にわたりローテーション・グループをプールすれば年間の平均統計とともに月毎の変動を見ることもできる。もちろん、さらに長期にわたりプールする場合には、物価変動その他の考慮すべき要素も増えるので注意が必要である。

つぎに、データの性格上考慮しておくべき問題を2つ指摘しておく。第1に、このデータの中にはアメリカを去った人々が算入されていない。アメリカに定着したメキシコ人とメキシコに帰国した人々との間に重大な格差があるとするとバイアスの原因になる。移民の場合には自国に帰るものが多くおり、もし彼らが定着に失敗して帰るのであれば、残っている定着移民は成功者の集団ということになり、滞在の長さや労働能力とが相関関係を持ち、古いコホートほど厳選された集団ということになる。しかし、逆に成功して故郷に帰るという可能性もあるし、あるいは定着せざるを得ないほどに困窮化してしまうこともありうる。この問題に関しては定説はなく、本研究においては統計的に影響を極小化する程度で十分であるとした。(Grogger and Trejo 2002: 6-8)

第2に、クロスセクション・データ(ある1時点に収集されたデータ)における世代間

¹³ これは金銭にかかわる質問が敬遠されることから、最後の月に質問することによりそれ以前に回答拒否を受けて回答率や回収率が低下することを回避しているものと思われる。

格差は必ずしもこれが時系列上の変化を反映しているものとはいえないという問題がある。たとえば現時点での2世の大人の特徴が、今の1世の子供が成長したときの特長であるというのは難しい。というのも、時代が変わると移民コホート（同時期に移民してきた人々をグループ化したもの）も変化する可能性があり、この変化は時系列データでは把握できないため、世代間格差の推計にバイアスがかかるおそれがある。もしコホートの質が歴史的に低下しているのであれば、世代の影響つまり経過時間に対する適応の度合いは過大評価に流れる（Borjas 1993;1995）。しかし、メキシコ系移民労働者のコホート別労働能力は歴史的に向上してきているので（Smith 2003）本研究におけるバイアスの方向は、たとえそれがあるとしても過小評価に流れると思われる。また、2003年までのデータには80年代にやってきたメキシコ人1世の子供が成長した2世としてかなり含まれているので、いわゆる時代的格差は65年の前と後のようには大きく離れていないと考えられる。統計モデルでは年齢やインタビューの時期も考慮に入れられており、以上のようなバイアスはごく小さいと見ていいだろう。

本研究は労働力人口を対象とするため、抽出標本は年齢25～59歳の自営業者を除く男女の労働者で、週10時間以上労働し、時間当たり\$1～\$500の収入を得ている労働者とした。この定義により学生のすべてと非正規労働者のほとんどが標本から除去された。この結果Grogger and Trejo（2003）とほぼ同等の標本人口を得た。しかし、このあとの世代の定義は彼らと異なっている。メキシコ人移民とメキシコ系アメリカ人は以下の4カテゴリーに分けられる。

表1 在米メキシコ人の分類

世代	メキシコ人	本人の出生地	父母の出生地	標本数(%)*		平均年齢(歳)	
				男	女	男	女
1世	Yes	メキシコ	両者メキシコ	11,522 (60.0)	5,443 (42.9)	36.5	37.8
純 2世	Yes	USA	両者メキシコ	1,200 (6.2)	1,122 (8.8)	35.9	36.1
2.5世	Yes	USA	メキシコ&USA	1,047 (5.5)	941 (7.4)	39.5	39.5
3世	Yes	USA	両者 USA	5,434 (28.3)	5,180 (40.8)	38.4	38.6

* これは標本数にもとづく計算から単純に求めた割合であり、母集団における分布とは多少の誤差がある。

表1に示されるように、出身民族 (Ethnic Origin) をメキシコ系 (Mexican American, Chicano, Mexican, Mexicano) と回答していることが抽出の第一条件である。その上でメキシコ人移民の1世とは、回答者本人がメキシコ生まれで両親がともにメキシコ生まれであること¹⁴。純2世の範疇に入る条件はまず本人がアメリカ生まれであり、両親がともにメキシコ生まれであること。本人がアメリカ生まれ、片親がメキシコ生まれでもう一方がアメリカ生まれの場合には、これを2.5世と分類する¹⁵。そして3世とは本人がアメリカ生まれで両親もともにアメリカ生まれというメキシコ系アメリカ人である。そして最後にアロケーションとって、本人または父母の出生地、あるいは出身民族が統計局によって割り当てないし補填されているケースが多少あり、それらは本人の回答にもとづいていないので、本研究の標本からは除いている。右端の割合から分かるように、純2世と2.5世は相対的にその数が少ないが¹⁶、絶対数で見ると少なくとも900人あまり観察されているので標本サイズが小さいという問題はない。

以上の定義には考慮しておくべき問題が2つある。第1に、定義の第1条件は自己申告 (self-identification) による出身民族の選択である。つまり、自分が自分をどの民族と見なすかが問題なのであり、両親ないし片親がメキシコ生まれであっても「アメリカ人」や「その他」と回答するケースが生じてくる。定義上彼らは標本から除外されるが、残った標本のみでメキシコ系住民の適応について偏りのない評価ができるかという問題である。逆にいえば、2世3世がメキシコ人というアイデンティティを選ぶこと自体にマイナスの自己選択バイアスが存在する可能性があるということである (Waters 1990)¹⁷。マイノ

¹⁴ 回答者がメキシコ生まれで両親ないし片親が他国生まれ、特にアメリカ生まれの場合、本人は入国時からアメリカ人であり、むしろ2世の要素が強い。しかしこれは非常に例外的なケースで、標本からは除外してある。

¹⁵ この場合にも一方の親のメキシコ以外の出生地がアメリカでもメキシコでもない外国というケースはまれにありうるが、これも非常に例外的なので標本からは除外している。

¹⁶ 幼少時 (通常は12歳以前) に移民してきた1世は1.5世と呼ばれ、言語や習慣の取得を考慮すると2世に近いと見なされることがあり、それは確かに合理的な側面もある。しかし彼らを本研究に取り入れるとすれば純2世はともかく、2.5世と3世の中に非常に特殊なメキシコ生まれを含むことになる。つまり両親ないし片親がアメリカ生まれだが、本人はメキシコ生まれで幼少時にアメリカに来たというケースで、これはむしろ除外するほうがよいと決断した。

¹⁷ 本研究のデータセットではこの種のケースが10年間に約800人採集された。彼らの時間給は概してメキシコ系を自認するグループと比べてやや高く、アイデンティティの喪失と経済的適応が同時に生じるという同化

リティに自己同定することと経済的な適応が負の相関関係にあるとすれば、メキシコ系2世や3世は不適応者を多く含む傾向があることになり、本来のアメリカ出生メキシコ人の成功度を過小評価してしまうことがありうる。この問題に対応するには、回答者の両親の人種・民族を知り、親子間でのアイデンティティの移行を確認する必要があるが、本研究で使用するCPSデータでは父母の出生地しか明らかにならない。回答者の父母が回答者と同居している場合には、その父母自身のケースがデータ中に存在するので彼らの人種・民族を知ることができるが、そのようなケースは非常に限られている。しかも、たとえ親がメキシコ生まれでも本人が非メキシコ系を選択しているという場合、それが必ずしも適応の指標とはいえず、例えば回答者本人がアングロ・サクソンであったり、アジア系の養子であったりする可能性も否定できないので、メキシコとの関連をもつ人々全て確信をもって1つのグループと見なすのは困難である。

メキシコ系の世代定義における2つめの問題は、ここでいう3世が実際には3世以降のすべてのメキシコ系アメリカ人を含んでいることである。調査の質問項目が回答者の祖父母の出生地にまでは及んでいないため、両親の出生地がアメリカの場合には3世のみを特定することができないのである。百年あまり前まではニューメキシコやカリフォルニアはメキシコの領土だったので、古い家系が続いていてそれが調査対象に入る可能性もゼロではない。しかしBorjas (1993) も指摘するように彼らの大部分は3世であり、4世・5世の存在は無視しうる程度である¹⁸。

3. 分析対象の基本特性

表2は、メキシコ人移民1世・純2世・2.5世・3世および参考のために黒人と白人のネイティヴ¹⁹の基本的な特性を、男女別に紹介している。まず、時間あたり収入は、被雇用者の賃金形態（時給・週給・月給など）や労働時間が多様なため、週あたり労働時間等

論的な仮説が成り立つ可能性を示唆している。他の分類との齟齬が生じるため本研究では分析に入れなかったが、彼らの存在も無視されるべきではないだろう。

¹⁸ 2世代で同居している家族に限れば3世も特定できるが、その場合には親と子が独立している世帯を除外することになり、賃金収入を得ている2世は独立する傾向が高いと思われるため、著しい標本数の減少を余儀なくされるであろう。

¹⁹ ここではいわゆる非ヒスパニック（Non-Hispanic）系の黒人や白人を指す。

表2 メキシコ系の世代グループならびに黒人と白人の基本特性1994-2003

	男性						女性					
	メキシコ系			非ヒスパニック系			メキシコ系			非ヒスパニック系		
	1世	2.5世	純2世	3世	黒人	白人	1世	2.5世	純2世	3世	黒人	白人
時間収入\$ (平均値)*	9.77 (.052)	14.90 (.263)	13.39 (.224)	13.96 (.111)	13.02 (.048)	18.02 (.022)	7.98 (.061)	11.87 (.237)	11.45 (.202)	11.41 (.092)	11.69 (.039)	13.84 (.018)
(中央値)	8.27	12.73	11.58	12.04	11.15	15.48	6.80	10.08	9.60	9.71	9.78	11.65
既婚	0.67 (.004)	0.70 (.014)	0.61 (.014)	0.65 (.006)	0.53 (.003)	0.70 (.001)	0.63 (.007)	0.59 (.016)	0.55 (.015)	0.57 (.007)	0.37 (.003)	0.65 (.001)
高校卒業	0.34 (.004)	0.83 (.012)	0.76 (.012)	0.80 (.005)	0.89 (.002)	0.93 (.001)	0.41 (.007)	0.84 (.012)	0.82 (.012)	0.83 (.005)	0.91 (.002)	0.95 (.000)
パートタイム	0.04 (.002)	0.04 (.006)	0.05 (.006)	0.04 (.003)	0.05 (.001)	0.03 (.000)	0.18 (.005)	0.15 (.012)	0.14 (.010)	0.15 (.005)	0.11 (.002)	0.18 (.001)
都市圏	0.42 (.005)	0.29 (.014)	0.34 (.014)	0.32 (.006)	0.42 (.003)	0.16 (.001)	0.41 (.007)	0.33 (.015)	0.35 (.014)	0.34 (.007)	0.44 (.003)	0.17 (.001)
職業**												
高熟練	0.05 (.002)	0.21 (.013)	0.17 (.011)	0.19 (.005)	0.19 (.003)	0.33 (.001)	0.08 (.004)	0.28 (.015)	0.26 (.013)	0.26 (.006)	0.27 (.003)	0.40 (.001)
中熟練	0.37 (.004)	0.45 (.015)	0.46 (.014)	0.47 (.007)	0.39 (.003)	0.44 (.001)	0.31 (.006)	0.51 (.016)	0.52 (.015)	0.52 (.007)	0.44 (.003)	0.45 (.001)
低熟練	0.59 (.005)	0.34 (.015)	0.38 (.014)	0.34 (.006)	0.42 (.003)	0.23 (.001)	0.61 (.007)	0.21 (.012)	0.22 (.013)	0.21 (.006)	0.29 (.003)	0.16 (.001)

データ: CPS 1994-2003. カッコ内は標準偏差。* 消費者物価指数により1998年価格で表示している。

標本数: 男性黒人23,220; 白人226,837; 女性黒人31,230; 白人213,200。

** この高・中・低3分類はメキシコ人労働者の男女の職業別平均賃金にもとづいて作られた。高熟練とは: executive, administrative, and managerial, professional, specialty occupations; 中熟練は: technicians and related support, sales, administrative support including clerical jobs, protective and other services, precision production, craft, repair occupations; として低熟練職業は: private household, machine operators, assemblers and inspectors, transportation and material moving occupations, handlers, equipment cleaners, helpers, laborers, farming, forestry fishing occupations である。

の変数を用いて時間あたりの収入に換算したものである。収入や所得にかんする統計は歪度が高いので平均値と中央値を併記してある。それを見ると、メキシコ人1世労働者の収入が非常に低く、白人は時間あたりその2倍近くを稼いでいることがわかる。また男性に限ってみれば、2世以降のどのメキシコ系労働者も黒人労働者より高い収入を得ている点も興味深い。そして男女ともに、メキシコ系2.5世はメキシコ系の中では最高の収入を得ている。しかしメキシコ系の女性労働者のあいだでは世代間格差は男性の場合よりもかなり小さい。

メキシコ系2.5世労働者は男女ともに、表1で見たように他のメキシコ系労働者よりも平均してやや年齢が高いことに加え、より既婚率が高く、より高卒以上の教育を受けている比率が高い。パートタイム労働者の混入については男性に比べ女性のほうが多いほかには、グループ間で目立った格差はみられない²⁰。居住地域でみると、メキシコ系2.5世の男性労働者において都市圏（Central City）に住む比率が他に比較してやや低い（29%）。白人ネイティヴにおいて都市圏居住率が非常に低いのは、彼らのなかで郊外化が進んでいることと、農村居住者・土地所有者に白人が多いことが理由だと思われる。メキシコ系1世の都市居住率がむしろ黒人のそれに近いことをみると、その比率の低下は中流化つまり白人中間層への接近を意味しているかもしれないが、この格差が将来縮小するとは必ずしもいえない。

つぎに職業の熟練度別分布をみると、メキシコ系2.5世において高熟練職が男性21%・女性28%と、他の世代や黒人よりも多少高度な構成が見られるが、白人ネイティヴのそれぞれ33%と40%にははるかに及ばない。黒人ネイティヴとの違いはむしろメキシコ系のほうが中熟練職に厚く分布している点であろう。メキシコ系ネイティヴの3グループに限って言えばその差は最大でも4%と非常に小さく、2.5世の優位性がどの程度なのかはこれだけでは確認できない。そこで、さらに彼らの就業する産業もまじえて世代間の差異を検証する。

²⁰ パートタイム労働者は雇用形態の違いから分析対象にするべきか議論の余地があるが、前述した年齢、収入、労働時間等の条件を満たしたとすれば、ほぼ正規雇用と同様に働いていると見なしていいのではないかと考え、標本内に残した。

4. 産業と職業の分布にかんする分析

表3は各世代の労働者の産業別分布を、おおまかに8種類に分けて示したものである。まず、メキシコ人移民1世が非常に独特の就業パターンをしめしているのは明らかである。男性の3分の1近くが農林水産業と建設業・鉱工業（鉱工業従事者は非常に少ないが）で働いている。これらの産業に就くものの多くは賃金・労働条件ともに低水準のもとで働いていると思われる。男女の相違は大きく、より多くの男性が肉体労働に、そしてより多くの女性が製造業、小売・卸売やサービス産業に就いている。

表3 就業している産業の世代間・人種間比較, 1994-2003

男性	メキシコ系				黒人	白人	計
	1世	2.5世	純2世	3世			
(1)	31.27	13.75	17.67	16.36	8.66	12.96	13.47
(2)	14.8	12.7	12.33	12.33	13.32	15.89	15.52
(3)	11.99	9.74	9.58	9.37	9.64	8.86	9.08
(4)	3.74	10.41	9.5	9.31	12.86	9.09	9.20
(5)	19.75	16.81	19.25	18.57	15.68	17.17	17.19
(6)	4.43	5.54	5	5.26	4.91	4.4	4.47
(7)	4.04	13.66	11.67	11.76	15.41	14.39	13.96
(8)	9.98	17.38	15	17.04	19.52	17.24	17.11

女性	メキシコ系				黒人	白人	計
	1世	2.5世	純2世	3世			
(1)	4.41	1.7	2.23	1.81	0.76	2.32	2.16
(2)	12.31	5.95	5.53	6.16	5.75	6.18	6.25
(3)	17.64	5.53	8.02	6.56	6.8	6.07	6.42
(4)	1.65	3.83	5.79	4.88	6.52	4.3	4.53
(5)	20.74	18.07	20.23	23.78	15.16	20.34	19.78
(6)	16.3	5.63	6.6	6.41	5.69	4.68	5.09
(7)	15.6	40.91	31.73	32.36	37.35	38.24	37.51
(8)	11.35	18.38	19.88	18.03	21.97	17.88	18.25

産業分類

(1) 農林水産業；建設；鉱業	(6) 公共サービス；公衆衛生サービス 私的家庭サービス；家庭外の私的サービス
(2) 耐久消費財製造業	(7) 娯楽；レクリエーション 病院・医療サービス；教育；社会サービス 他の専門サービス
(3) 非耐久消費財製造業	
(4) 運輸・通信	(8) 金融；保険；不動産；自動車・修理； 行政；軍事
(5) 小売・卸売	

1世と比べると2・3世には確かに一種の変化が見られる。たとえば男性の場合には農林水産業と建設業への就労者が1世で3分の1に対して2・3世では14%—18%である。そしてその差分の多くはおそらく1世には就労困難な業種、運輸・通信業とサービス業によって吸収されている。女性については、1世のかなりの部分（約30%）が製造業についており、これがネイティヴになると10%代と、かなり小さい割合になる。男女ともに、メキシコ系ネイティヴの産業分布傾向は1世よりもむしろ黒人・白人に近く、ネイティヴのなかでの民族間のちがいが問題になるだろう。メキシコ系純2世、2.5世、3世の就労産業のパターンはかなり類似しており、彼らが統計的に区別されうるかどうかテストで確認する必要がある。

職業および産業の構成における世代間格差を測定するために上記の表2と表3における分布をもちいてペア式カイ2乗テストをおこなった。その結果と2変数の関連度の強さを示すクラマーのVの値が表4に示してある。カッコ内にはテスト値の有意度が示してある。5グループで作るペアの全ての組み合わせは10通りありうるが、表が煩雑になるため重要と思われるものだけ取り出している。

一見して明らかなように、メキシコ系ネイティヴはひとつの類似したグループをなしており、そして他の移民や黒人・白人ネイティヴとのあいだには有意な格差がある。メキシコ系ネイティヴ間の違いはごくわずかだが、男性の場合には産業的には純2世と3世が近く、職業の面では2.5世と3世が近いという交錯した結果になった。クラマーのVを見ると、特にメキシコ系移民1世とネイティヴとの格差が大きい（所属世代と産業・職業構成との関連が強い）。これは3世が純2世と同様の産業構造に留まりつつ、多少は職業的に上昇しているということなのかもしれないが、これはかなり小さな違いをめぐっての解釈なので決定的な違いはないと考えたほうがよいだろう。女性に関しては、産業・職業両面において、2.5世は純2世・3世からやや（とくに産業面で）乖離している。

黒人・白人と比較した場合のメキシコ系3世の位置づけは、産業構成で見るとやや白人に近く、職業構成をみると黒人に近い。これをもって、メキシコ系のアメリカ人は白人のもつ産業構成に近づいてはいるが、職業は低賃金の仕事をしているともいえるだろう。

表4 産業および職業構成の世代間格差のテスト結果

A. 産業の8分類にもとづく比較		
男性		
組み合わせ	カイ二乗テスト	クラマーのV
1世 vs. 2.5世	581.3 (<.0001)	.215
1世 vs. 純2世	425.8 (<.0001)	.183
純2世 vs. 2.5世	10.9 (<.1448)	.070
2.5世 vs. 3世	9.8 (<.1975)	.040
純2世 vs. 3世	7.2 (<.4066)	.034
3世 vs. 黒人	410.3 (<.0001)	.120
3世 vs. 白人	135.0 (<.0001)	.024
女性		
1世 vs. 2.5世	549.7 (<.0001)	.294
1世 vs. 純2世	595.6 (<.0001)	.301
純2世 vs. 2.5世	17.2 (<.0164)	.091
2.5世 vs. 3世	14 (<.0510)	.049
純2世 vs. 3世	17.1 (<.0169)	.054
3世 vs. 黒人	295 (<.0001)	.090
3世 vs. 白人	44.8 (<.0001)	.014
B. 職業の3分類にもとづく比較		
男性		
1世 vs. 2.5世	555.9 (<.0001)	.210
1世 vs. 純2世	405.0 (<.0001)	.178
純2世 vs. 2.5世	6.3 (<.0438)	.053
2.5世 vs. 3世	3.1 (<.2105)	.023
純2世 vs. 3世	3.7 (<.1548)	.024
3世 vs. 黒人	90.4 (<.0001)	.057
3世 vs. 白人	639.4 (<.0001)	.053
女性		
1世 vs. 2.5世	671.1 (<.0001)	.324
1世 vs. 純2世	686.1 (<.0001)	.323
純2世 vs. 2.5世	2.1 (<.3577)	.032
2.5世 vs. 3世	4.0 (<.1383)	.026
純2世 vs. 3世	0.4 (<.8176)	.008
3世 vs. 黒人	102.2 (<.0001)	.053
3世 vs. 白人	396 (<.0001)	.043

CPS 1994-2003 より作成

5. 時間収入にかんする分析

ここでは、メキシコ系ネイティヴの世代間の適応度の相違についてさらに分析するにあたり、曲線的同化論が唱えるような2世から3世への低落があるのか、または分断的同化論が示すような2世以降の停滞があるのかをを検証する。ここで注目したいのは、本研究

のように2.5世と純2世を分離した場合でも、先行諸研究が発見してきた2世の優位性ないし停滞が再確認できるかということである。

それらの分析のための多変量回帰分析の結果が表5aと5bに示されている。非説明変数は時間収入（実質ドル）の対数である。表5aは男性労働者、表5bは女性労働者について、それぞれ3つの一連のモデル（Nested Model）による推計の結果を提示している。モデルIは3世を準拠集団（Reference Group）とし、純2世と2.5世を示すダミー変数に加えて基本的な操作変数のみを含んでいる。

まず表5aの男性モデルによれば、婚姻状況、調査年、パートタイム労働か否かという条件を同じものとする、2.5世であるということは3世よりも時間収入を約6%引き上げる効果を持っている。他方で、純2世であるということは有意水準5%以下で、3世に比べ4%程のマイナス効果があることが判明した。

モデルIIには人的資本関連の変数、年齢（経験）・教育レベルを加えた。まえに述べたように、労働経験と親の入国コホートの影響とが年齢変数のなかに混在している可能性があるが、ここでの結果を見る限り50歳代前半をピークにしたカーブを描いており、一般に想定される賃金カーブと変わらないことがわかるので、その限りでは親のコホートの影響は少ないものと考えられる。教育レベルの効果は直線的な正の相関関係を示しており、本人の教育レベルが、収入の重要な決定要因であることが分かる。そして2.5世についての係数は有意にプラス約4%にやや減少し、純2世にかんしては有意でなくなった。モデルIにあった他の係数はモデルIIでも比較的不変であることから、モデルIで観察された3世に対する純2世のマイナス要因は、2世の相対的な経験の少なさと教育レベルの低さに起因していることが推察される。これはいいかえれば、もし純2世の年齢構成・教育歴が2.5世と全く同等であれば、純2世と3世のあいだの差はなくなるが、2.5世のほうにはモデルIIではまだ説明できていないプラスの要因があるということになる。

そこでモデルIIIでは産業と地理的要因を導入した。その結果、プロフェッショナル・サービスやファイナンス部門で働くメキシコ系男性労働者は農業や製造業より比較的低い賃金しか得ていない（他の条件を一定と仮定すれば）ことが示された。これは一見意外だが、人的資本等の他の条件をコントロールしていることから考えて、一般的には高収入と思われる産業のなかで彼らは比較的低収入の職業についているということなのではないだ

表5a メキシコ系労働者の時間収入の対数に関する回帰分析（男性）1994-2003

モデル	I		II		III	
	係数	Pr< t	係数	Pr< t	係数	Pr< t
切片	2.343	(.000)	2.190	(.000)	2.208	(.000)
2.5世	.058	(.001)	.044	(.004)	.030	(.044)
純2世	-.040	(.012)	.015	(.307)	-.028	(.050)
既婚	.142	(.000)	.118	(.000)	.120	(.000)
調査年	.016	(.000)	.012	(.000)	.012	(.000)
パートタイマー	-.398	(.000)	-.346	(.000)	-.320	(.000)
年齢 (基準=25-29)						
30-34			.076	(.000)	.076	(.000)
35-39			.178	(.000)	.171	(.000)
40-44			.213	(.000)	.201	(.000)
45-49			.206	(.000)	.194	(.000)
50-54			.232	(.000)	.215	(.000)
55-59			.189	(.000)	.184	(.000)
教育 (基準=12年)						
8年以下			-.342	(.000)	-.303	(.000)
9から11年			-.230	(.000)	-.208	(.000)
13から14年			.127	(.000)	.112	(.000)
15から16年			.425	(.000)	.412	(.000)
17から20年			.567	(.000)	.581	(.000)
産業 (基準=耐久消費財製造業)						
農林水産業；建設；鉱業					.019	(.323)
非耐久消費財製造業					.031	(.179)
小売・卸売					.079	(.000)
運輸・通信					-.118	(.000)
公共サービス・私的サービス					-.095	(.000)
娯楽・医療・他の専門サービス					-.088	(.000)
金融・保険・行政サービス					.053	(.015)
地理要因 (基準=非都市圏)						
都市圏の中心					.101	(.000)
残りの都市圏					.127	(.000)
特定できず					.030	(.096)
その他					.080	(.031)
地域 (基準=New England)						
Middle Atlantic					.010	(.930)
East North Central					-.043	(.645)
West North Central					-.087	(.355)
South Atlantic					-.064	(.502)
East South Central					-.161	(.174)
West South Central					-.184	(.069)
Mountain					-.055	(.551)
Pacific					.003	(.973)
California					.033	(.717)
Texas					-.159	(.082)
R-2乗	.056		.256		.314	

ろうか。このような産業と職業の錯綜した関係はネイティブの黒人や白人の間では（この結果は非表示）みられなかったことから、メキシコ系男性労働者に特有のパターンと考えてよいだろう。

モデルⅢからは、居住地域の地理的特徴²¹もまた収入の重要な決定要因であることがわかる。都市中心部と郊外に居住するメキシコ系労働者は、非都市居住者よりもそれぞれ約15%と16%多く収入を得ている。都市部かどうかということは重要だが、アメリカのどの地域に住んでいるかということは別問題である。連邦統計局による9区域²² (Division) とメキシコ移民の中心であるカリフォルニア州とテキサス州を区分して、ニューイングランド州を基準に分析すると、テキサスとその周辺諸州（アーカンソー、オクラホマ、ルイジアナ）でやや有意にマイナスの影響があるほかには、重大な地域差は見られなかった。

このモデルⅢで最も重要なのは純2世がマイナス2.8%、2.5世がプラス3%程度の効果を持つとして、ある程度の有意性をもって示されたことである。もしこの2グループを区別せずに（従来の2世全般の定義をもちいて）このモデルを当てはめたとすれば、これらの効果は相殺し合って無効果になることが容易に見て取れる²³。したがって、先行諸研究における従来の2世の世代間比較における位置づけは、純2世と2.5世が混在することで、かろうじてゼロ効果 (Grogger and Trejo 2002) または、表面的なプラス効果 (Livingston and Kahn 2002) が観察されてきたものだったといえることができる。

表5bには女性のメキシコ系労働者に男性と同じモデルを適用した推定結果が示してある。これが男性のケースと大きく異なるのは、最終モデルで2世と2.5世の係数がともに非有意になることである。正負の記号は男性と同様のパターンではあるものの、無視すべきレベルの有意性しかない。つまり女性の場合、純2・2.5・3世間の違いは、モデル中の他の観察しうる諸要因によってほぼ説明可能であり、ネイティブのメキシコ系として区別がないという結論になる。なぜ女性においてこのような結果が出るのか。推計結果を見

²¹ ごくまれに地理的特徴が「特定できず」となる場合がある。またデータの欠損もあったので、それらにダミー変数を置いた。

²² 各区域に属する州名などについてはhttp://www.census.gov/geo/www/us_regdiv.pdfを参照。

²³ 実際に2世と2.5世を1つにまとめて同モデルを推定したところ、その係数は有意性のない0.0009で、確率的にゼロであるという結果が出た。

表5b メキシコ系労働者の時間収入の対数に関する回帰分析（女性）1994-2003

モデル	I		II		III	
	係数	P-値	係数	P-値	係数	P-値
切片	2.232	(.000)	2.068	(.000)	2.233	(.000)
2.5世	.046	(.007)	.021	(.159)	.005	(.723)
純2世	.012	(.442)	.036	(.011)	-.017	(.221)
既婚	.063	(.000)	.037	(.000)	.041	(.000)
調査年	.013	(.000)	.010	(.000)	.010	(.000)
パートタイマー	-.289	(.000)	-.222	(.000)	-.190	(.000)
年齢 (基準=25-29)						
30-34			.071	(.000)	.073	(.000)
35-39			.120	(.000)	.110	(.000)
40-44			.146	(.000)	.135	(.000)
45-49			.153	(.000)	.142	(.000)
50-54			.178	(.000)	.168	(.000)
55-59			.182	(.000)	.172	(.000)
教育 (基準=12年)						
8年以下			-.327	(.000)	-.267	(.000)
9 から 11 年			-.237	(.000)	-.195	(.000)
13 から 14 年			.154	(.000)	.129	(.000)
15 から 16 年			.486	(.000)	.461	(.000)
17 から 20 年			.705	(.000)	.697	(.000)
産業 (基準=耐久消費財製造業)						
農林水産業；建設；鉱業					-.047	(.238)
非耐久消費財製造業					-.056	(.059)
小売・卸売					.073	(.012)
運輸・通信					-.213	(.000)
公共サービス・私的サービス					-.220	(.000)
娯楽・医療・他の専門サービス					-.117	(.000)
金融・保険・行政サービス					.007	(.776)
地理要因 (基準=非都市圏)						
都市圏の中心					.150	(.000)
残りの都市圏					.162	(.000)
特定できず					.057	(.001)
その他					.105	(.005)
地域 (基準=New England)						
Middle Atlantic					-.179	(.099)
East North Central					-.139	(.132)
West North Central					-.182	(.053)
South Atlantic					-.170	(.075)
East South Central					-.120	(.294)
West South Central					-.207	(.040)
Mountain					-.179	(.049)
Pacific					-.099	(.303)
California					-.058	(.524)
Texas					-.248	(.006)
R-2 乗	.055		.285		.368	

ると、教育レベルおよびパートタイマーや産業の操作変数が世代間格差のかなりの部分を吸収している。そこから推測すると、家庭や労働市場における女性に対するなんらかの性差別によって、女性の場合には世代間の差別化が生じにくいものと思われる。女性の場合に興味深いのは、男性に比べ地域性が顕著に現れることであり、テキサスを筆頭にミシシッピ川以西の南部と中西部・山岳部にマイナス効果が存在している。これらは食肉産業などを中心に移民労働者を雇用する産業が急拡大している地域であり、また山岳区域に属するネヴァダ州などではホテル等のサービス産業が興隆している。それが2世以降のメキシコ人女性にどのような影響を及ぼすかは正確には分からないが、女性の場合には移民の就業先と2世の就業先が重なる場合が多いかもしれない。

6. 結論

本研究はネイティブのメキシコ系労働者を対象に、世代間の動態と外国生まれの親の影響を結びつけて研究した。この研究は世代間の動態の問題を（純2世と2.5世を含む）2世と3世の間の問題として焦点を絞って観察した。そして直線的、曲線的、停滞的という3種の適応パターンを想定し、メキシコ系労働者の動態は停滞的であるという仮説を検証した。また「少なくとも片親が外国生まれである」という2世の通常の定義は2.5世を含んでいるために結果に何らかの歪みが生じると考え、これらを区別したうえでの分析を実行した。そして上記のように、特に男性のメキシコ系労働者の場合には明らかに純2世よりも2.5世のほうが優位な立場にあり、3世はこれらの中に位置するという結果が出た。2世の2タイプを混同したデータを用いた先行諸研究では、移民世代間の曲線的同化論を支持する研究者は2.5世からの情報をより重視し、停滞的同化論をとる研究者は純2世からの情報を重視していたと考えられる。

以上から推論すると、メキシコ系ネイティブのあいだで2極化が起こっているという解釈が成り立つ。2.5世のメキシコ系労働者は、ネイティブの親の言語や慣習上の利点を享受するために、両親ともにメキシコ生まれの者よりも高い収入を得ている。したがって2.5世は純2世より高い経済的適応力を持ち、直線的同化に近い円滑さで文化喪失と社会経済的適応を逃げるといえる。その一方で純2世にかんする分析は彼らの停滞的な軌道を示唆している。職業・産業の構成も収入レベルについても純2世は3世と大差がなく、また白

人とは一線を画しているので停滞的ないし分断的同化が進行している可能性がある。しかし確信をもってそう結論付けるには3世にかんする情報が不足している。

3世が2.5世と純2世の間にあるというのは、このカテゴリーが2.5世と純2世の子供の世代を両方を含み、わずかだが4世以降の世代も含んでいるということから、一種の「平均への回帰」が生じているものと考えられる。女性労働者の場合には2世のときからそのような傾向があるようで、メキシコ系の各世代間には2世以降には統計的に有意な相違は見られなかった。もし3世のなかから何らかの方法で2.5世の子供と他の子供を分離できるならば3世も両極的な傾向を示すかもしれない。CPSから同居家族を抽出して3世の祖父母の出身地を特定することは、配慮を要するものの現在のデータの制約下でも可能な課題である。同じくデータ上の制約で今回分析できなかったグループとしては、メキシコ系と自己同定していないがメキシコと関係のある2世や3世も、同居家族に絞って特定することができる。この場合もちろん個人世帯や子供のいない世帯は除外されるが、その限りで有意な発見があるかもしれない。

最後にメキシコ系2.5世のネイティブの親もメキシコ系、つまり民族用の世代間カップルである可能性が高いことを再度指摘しておく。民族内の世代間カップルと多民族間カップルではかなり違いがあると思われるので、どちらの子供がより速やかに経済的適応に成功するかという問題も今後の課題である。

参考文献

- Bean, Frank D and Stevens, Gillian. 2003. *America's Newcomers and the Dynamics of Diversity*. New York : Russell Sage.
- Borjas, George J. 1991. "Immigration and Self-Selection." In *Immigration, Trade, and Labor Market*, edited by Abowd, John M. and Richard B. Freeman. University of Chicago Press.
- . 1993. "The Intergenerational Mobility of Immigrants," *Journal of Labor Economics*, 11-1:113-135.
- . 1995. "Assimilation and Changes in Cohort Quality Revisited : What Happened to Immigrant Earnings in the 1980s?" *Journal of Labor Economics*, 13-2:201-245.
- . 1999. *Heaven's Door : Immigration Policy and the American Economy*. Princeton : Princeton University Press.
- Carliner, Geoffrey, 1980. "Wages, Earnings and Hours of First, Second, and Third Generation American Males," *Economic Inquiry*, 18(1) :87-102.
- Census Bureau 2005. "Facts for features and special editions" CB05-FF.14-3 (Rev.) September 8. http://www.CENSUS.gov/Press-Release/www/releases/archives/facts_for_features_special_editions/005338.html. (2005年9月30日)

- Census Bureau (by A. Dianne Schmidley and J. Gregory Robinson) 1998. "How Well Does the Current Population Survey Measure the Foreign-Born Population in the United States."
- Census Bureau 2001. *The Hispanic Population*. Census 2000 Brief.
- Census Bureau 2002. *Design and Methodology*. Current Population Survey Technical Paper 63RV.
- Child Trends Databank 2004. "Children in Poverty" <http://www.childtrends.org/indicators/4Poverty.cfm> (2005年9月30日)
- Chiswick, Barry. 1977. "Sons of Immigrants: Are They at an Earnings Disadvantage?" *American Economic Review* 67(1):376-380. (Errata AER, September 1977, p.775).
- Duncan, Brian and Stephen J. Trejo. 2004. "Ethnic Choices and the Intergenerational Progress of Mexican Americans," *Working Paper Series 2004-2005, No04-05-02*. Population Research Center, University of Texas at Austin.
- Gans, H. J. 1992. "Second Generation Decline: Scenarios for the Economic and Ethnic Futures of Post-1965 American Immigrants," *Ethnic and Racial Studies*, 15:173-192.
- Gordon, Milton. 1964. *Assimilation in American Life*. New York: Oxford University Press.
- Grogger, Jefferey and Trejo, Stephen J. 2002. *Falling Behind or Moving Up?: The Intergenerational Progress of Mexican Americans*. California: Public Policy Institute of California.
- Huntington, Samuel. 2004. "The Hispanic Challenge," *Foreign Policy*, March/April:30-45.
- Kao, Grace and Tienda Marta, 1995. "Optimism and Achievement: The Educational Performance of Immigrant Youth," *Social Science Quarterly* 76(1), pp1-19.
- Kao, Grace and Jennifer Thompson. 2003. "Race and Ethnic Stratification in Educational Achievement and Attainment," *Annual Review of Sociology*. 29:417-442.
- Livingston, Gretchen and Joan R. Kahn. "The American Dream Unfulfilled: The Limited Mobility of Mexican Americans." *Social Science Quarterly* 83(4):1003-1012, 2002.
- Pong, Suet-ling. 2003 "Immigrant Children's School Performance." *Working Paper* 03-07, Population Research Institute, The Pennsylvania State University
- Portes, Alejandro and Lingxin Hao. 2004. "The Schooling of Children of Immigrants: Contextual Effects on the Educational Attainment of the Second Generation." *Proceeding of National Academy of Science* 101:11920-27.
- Portes, Alejandro and Rumbaut, Rubén G. 2001. *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. Berkeley and New York: University of California Press.
- Smith, JP. 2003. "Assimilation across the Latino Generations," *American Economic Review* 93:315-319
- Trejo, Stephen J. 1997. "Why Do Mexican Earn Low Wages?" *The Journal of Political Economy*, 105(6):1235-1268.
- Van Hook, Jennifer. 2004. "Poverty Grows Among Children of Immigrants in US" Feature Story, Migration Policy Institute. <http://www.migrationinformation.org/Feature/display.cfm?ID=188> (2005年9月30日)
- Waters, Mary. 1990. *Ethnic Options: Choosing Identities in America*. Berkeley; Los Angeles: University of California Press.
- Waters, Mary C. and jimenez, Toham R.2005. "Assessing Immigrant Assimilation: New Empirical and Theoretical Challenges" *Annual Review of Sociology* 31:105-25.
- Waldinger, Roger and Perlmann, Joel. 1998. "Are the Children of Today's Immigrants Making It?" *The Public Interest*, No. 132:73-96.